

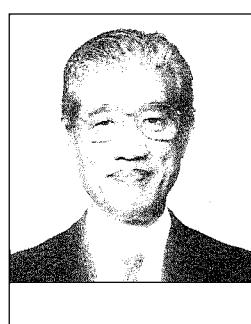
企画課主任	嶋崎真理子	保健環境課主任技能員	降矢 和男	消防士長・消防署副主査	杉本良之介
税務課主任	矢嶋 亘	市立病院の職員	伊藤佐代子	消防士長・消防署副主査	藤本 重雄
保健環境課主任	高部 章	婦長	鈴木 浩仁	消防副士長・消防署	石原 安久
福祉事務所主任	平井 鉄二	主任栄養士	駒谷 好美	(兼)文化会館長	(大学教務職員)
建設課主任	外川 恵子	診療報酬計算員	鈴木 浩仁	(兼)中央公民館長	木村 雅俊(大学教務職員)
都市計画課主任	藤本 信夫	老人保健施設の職員	田中マチ子	(兼)盛里公民館長	齊藤 進(市立病院)
用地課主任	加藤あき子	婦長	武井 邦夫	(併)書記	森嶋 由加(市立病院)
地籍調査課主任	清水 正彦	消防職員	紫村 聰仁	水道企業職員	菊地ツヤ子(市立病院)
大学教務厚生課主任	高山 竜一	消防監參事・消防本部次長	堀内 智恵	公平委員会の職員	古屋美智子(市立病院)
大学総務課主任	清水 敬	消防司令長・消防署長	渡辺 正	監査委員事務局の職員	西島 富美(市立病院)
商工観光課事務吏員	三浦 勝之	消防司令長・消防課長	阿部 正義	監査委員事務局の職員	山下 江美(市立病院)
建設課技術吏員	鈴木 裕一	消防司令長・消防課長	井上 佳久	監査委員事務局の職員	佐藤 真紀(市立病院)
建設課技術吏員	秦 栄一	(兼)予防係長・消防課長補佐	佐藤 政啓	監査委員事務局の職員	志村 裕子(老人保健施設)
大学教務厚生課事務吏員	田辺 香栄	(兼)消防第一部第一係長	志村 美治	監査委員事務局の職員	武井重紀子(老人保健施設)
企画課事務員	秦 和也	(兼)消防第一部第二部第一係長	堀内 治三	監査委員事務局の職員	相川 周子(老人保健施設)
消防課副主査	萩原みどり	(兼)消防署副主幹	吉田 雅彦(消防署)	監査委員事務局の職員	佐藤 真紀(市立病院)
選挙管理委員会事務局の職員	萩原みどり	社会教育課主任	梅田 貴士(消防署)	監査委員事務局の職員	菊地ツヤ子(市立病院)
渡辺 一貴(都市計画課事務吏員)	田中 裕二(税務課事務員)	土地開発公社の職員	紫村 聰仁	監査委員事務局の職員	木村 雅俊(大学教務職員)
小糸真由美(学校教育課事務員)	田中 八代(保健環境課事務員)	主幹・次長	井上 佳久	監査委員事務局の職員	齊藤 進(市立病院)
中村 洋一(社会教育課事務員)	高部 治男	採用者	佐藤 親亘(水道課主幹)	監査委員事務局の職員	森嶋 由加(市立病院)
廣瀬 敦士(農林課事務員)	高部 治男	主幹・次長	志村 修(税務課徴収主査係長)	監査委員事務局の職員	西島 富美(市立病院)
廣嶋 正寛(水道課技術吏員)	高部 治男	高部 治男	渡辺三枝子(福祉事務所副主査)	監査委員事務局の職員	山下 江美(市立病院)
日向 良和(大学図書館司書)	高部 治男	高部 治男	越後 芳子(市立病院総婦長)	監査委員事務局の職員	佐藤 真紀(市立病院)
大日方美恵(市立図書館司書)	猪狩 孝代(市立病院准看護婦)	高部 治男	猪狩 孝代(市立病院准看護婦)	監査委員事務局の職員	志村 裕子(老人保健施設)
富山奈帆美(市民課事務員)	見高今日子(市立病院薬剤師)	高部 治男	見高今日子(市立病院薬剤師)	監査委員事務局の職員	西島 富美(市立病院)
庄司 一浩(市民課事務員)	野口 雄二(老人保健施設准看護婦)	高部 治男	野口 雄二(老人保健施設准看護婦)	監査委員事務局の職員	山下 江美(市立病院)
若井 美穂(保健環境課事務員)	七澤 千浪(老人保健施設准看護婦)	高部 治男	七澤 千浪(老人保健施設准看護婦)	監査委員事務局の職員	佐藤 真紀(市立病院)
志村 泰宏(建設課事務員)	近藤 幹雄(大学教授)	高部 治男	近藤 幹雄(大学教授)	監査委員事務局の職員	西島 富美(市立病院)
園部 晃子(大学総務課事務員)	和田 明子(大学教授)	高部 治男	和田 明子(大学教授)	監査委員事務局の職員	山下 江美(市立病院)
新保 祐司(大学教育職員)	右崎 正博(大学教授)	高部 治男	右崎 正博(大学教授)	監査委員事務局の職員	佐藤 真紀(市立病院)
春日作太郎(大学教育職員)	時田 真也(大学教務職員)	高部 治男	時田 真也(大学教務職員)	監査委員事務局の職員	西島 富美(市立病院)
中村 陽一(大学教育職員)	金 多美(大学教務職員)	高部 治男	金 多美(大学教務職員)	監査委員事務局の職員	西島 富美(市立病院)

学長就任ごあいさつ

ただしく過ごしているのですが、そうした忙しさの中にもあって、懐かしい都留文科大学に再び戻っているのだという思いはきわめて強く、まことに感慨深いものがあります。

都留文科大学は、私にとっては第二の母校のようなものであります。日本古典文学の研究者として、また大学の教員として、何とか一人前になれたのは、やはり何といつても都留文科大学あってのことだと思います。その「母校」に、果たしてどれほどのことが出来るか、今度は、私がお返しをする番です。

承知のよう、大学は今、どこでも大変きびしい状況のもとにおかれています。子どもの数が減って、短大を中心にくつか大学が潰れるという話は、決して虚構のものではありません。大学の評価を高めるにはどうしたらいいかこれから頭の痛い日々がつづくことになりそうですが、市民の皆さんとの協力を得ながら、こんなにも市民に愛されている大学はほかにはないと肝に銘じ、がんばっていきたいと思っています。よろしくお願ひいたします。



都留文科大学
学長
久保木 哲夫

昨年三月、年齢のこともあって、二十九年間もお世話をなった都留文科大学に別れを告げ、東京の私立女子大学に移って行った時には、まさかこういう形で再び都留の地に戻って来るとは夢にも思いませんでした。四月一日、市長から辞令交付、十日、新入生を迎えて入学式、その他、学年はじめにあたって毎日を何となく慌